



国立大学法人 鳥取大学 環境報告書 2026



©青山剛昌

Tottori University Environmental Report 2026

目次

学長メッセージ	P.1
環境憲章 / 環境報告書作成にあたって	P.2
1. 環境マネジメント	
1-1. 環境マネジメントシステム	P.3
1-2. 環境方針に関する目的・計画・取組状況	P.3
1-3. 環境リスクマネジメント	P.4
2. 教育・研究・社会貢献	
2-1. 環境トピックス	P.5
2-2. 環境に配慮した教育・研究・社会貢献活動	P.5-7
2-3. 環境に関する社会貢献	P.8
2-4. 附属学校部の取組	P.9-10
2-5. 構内事業者の取組	P.11
2-6. その他	P.12-13
3. 大学の社会的側面に関する取組	
3-1. 地域との関わり	P.14
3-2. 労働安全	P.14
4. 環境パフォーマンス	
4-1. マテリアルバランス	P.15
4-2. INPUT	P.16
4-3. OUTPUT	P.17-19
5. 環境コミュニケーション	P.20

～「地域から世界へ」

環境問題の解決に貢献できる

大学を目指して～



学長 原田 省

日頃より、鳥取大学の教育・研究活動に対し、温かいご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。『環境報告書2026』を公表するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

2025年に開催された大阪・関西万博は、持続可能な社会の実現に向けた国際的な対話を加速させる契機となり、「とっとリアル・パビリオン」などを通じて、鳥取の豊かな自然の魅力が世界へ発信されました。

一方で、昨今の記録的猛暑や「酷暑日」の設定に象徴されるように、気候変動や資源・エネルギー問題は一層深刻化し、私たちの日常の脅威となっています。

こうした地球規模の課題に対し、本学は教育・研究を通じた解決に取り組んでいます。一例として「乾燥地研究センター」ではスーダンの研究機関との共同研究により、暑さや乾燥に強い小麦の品種開発を進めてきました。同国で発生した内戦により、共同開発した小麦のタネ(育種家種子)が消失の危機に瀕しましたが、皆様からのクラウドファンディングによる支援を得て現地へ届けることで、食料安全

保障や持続可能な農業の実現に向けた研究を継続することができました。本学の知が地域を超え、世界の課題解決につながることを示す象徴的な取組です。

また、緊迫する世界情勢下でのエネルギー懸念に対しても、循環型社会の実現に向けて産学官民が連携し、それぞれの知見と技術を結集して取り組むことが不可欠です。

本学は、「鳥取」というリアルなフィールドでの「知と実践の融合」を基本理念に、今後も「地域から世界へ」国内外の環境課題解決に貢献してまいります。

創刊21年目を迎えた本報告書では、2030年度の温室効果ガス削減目標に向けた最新の取組や、附属学校・構内事業者と連携した多様な環境保全活動、地域や国際社会に貢献する研究成果を詳しくご紹介しています。自然豊かな鳥取の地で培ってきた本学の教育・研究活動や環境への取組をご覧いただき、本学への理解をより一層深めていただくとともに、持続可能な社会の実現について共に考える機会となれば幸いです。

環境憲章 環境基本理念

今日、地球環境問題の量的ならびに地理的な広がりや質的な深刻さが指摘され、環境との調和および環境負荷の低減は、世界的に喫緊の課題となっています。あらゆる人々が、環境に配慮した行動をすることが求められています。

わたしたちは豊かな自然環境に恵まれた鳥取の地の特性をいかし、自然環境を尊ぶ精神を育む教育と研究をめざしています。本学はこれまで、人々が自然生態系を守りつつ生活できるような仕組みの構築のために、中山間地の多い地元にとけ込み、地域と連携した活動を積極的に展開してきました。また乾燥地をはじめとする発展途上国に対する農業その他の技術協力を精力的に進め、地球環境問題の解決に貢献してきました。

鳥取大学のわたしたちは長年にわたるこのような活動の実績を誇りとして、「知と実践の融合」を謳う本学の理念のもとに、これを受け継ぎ、更に発展させ、世界の環境問題の解決に貢献していくことを決意しました。

環境基本方針

人間性あふれる教育と研究をととして、高い職業倫理と生命の尊厳を重んじる心を持った人間を養成し、地域から地球規模まで、環境問題の解決に貢献します。

全構成員が自然豊かなキャンパスの環境を守り、地域社会の環境保全に貢献します。

全構成員が実践をととして、人と生態系の健全なあり方を追求します。

環境関連の法令を遵守するとともに、省資源、省エネルギー、廃棄物と化学物質との適正管理、ならびに汚染防止などを積極的に進め、環境の保全に努めます。

2006年7月25日制定

カーボンニュートラル宣言（2022年6月28日策定）（[ハイパーリンク](#)）

カーボンニュートラル行動方針（2022年6月28日策定）（[ハイパーリンク](#)）

【その他鳥取大学に関する情報】

大学憲章・基本理念・目標

[トップページ>大学紹介>大学の理念・目標]

<https://www.tottori-u.ac.jp/about/spirit/charter/>

鳥取大学概要

[トップページ>大学紹介>大学の概要>大学概要・基礎データ]

<https://www.tottori-u.ac.jp/about/summary/data/>

アクセスのご案内

[トップページ>アクセスのご案内]

<https://www.tottori-u.ac.jp/access/>

環境報告書作成にあたって

本学は環境報告書を通じて、本学に関わるステークホルダーへ有用な情報を提供し、環境コミュニケーションを促進するために作成しています。本学の教職員をはじめ、学生及びそのご家族、卒業生、地元企業、地域の皆様に幅広くご高覧いただけると幸いです。なお、本学には特定事業者の責務として、事業活動に伴う環境負荷及び環境配慮の取組状況に係る年次報告が求められています。

大学名 国立大学法人 鳥取大学
所在地 鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101番地
創立 1949年(昭和24年)
学長 原田 省
報告対象地区

【鳥取地区】
鳥取・浜坂・白浜(一)・白浜(二)・溝口(伯耆)・蒜山・大塚・三朝・大寺屋・湖山(附幼)・湖山(附特)

【米子地区】

米子・米子(二)・西町・内町

※ 湖山北・皆生団地は職員宿舎のみのため対象地区より除外しています

【教職員・学生数】

区分	(単位:人)
教職員数	2,491
学部生	5,248
大学院生	1,060
附属学校生	891
合計	9,690

【土地・建物】

2025年5月1日時点

団地名	土地(m ²)	建物(m ²)
三浦	508,118	119,197
米子	134,144	153,024
浜坂	978,344	10,960
その他12団地	8,078,407	14,271
合計	9,699,013	297,452

報告対象分野

環境的側面・社会的側面

準拠した環境省
のガイドライン

環境報告ガイドライン(2018年版)
環境報告ガイドライン(2012年版)

準拠した法律

環境情報の提供の促進等による特定事業者等の環境に配慮した事業活動の促進に関する法律
第九条
特定事業者は、主務省令で定めるところにより、毎事業年度、環境報告書を作成し、これを公表しなければならない。

報告対象期間

2025年4月～2026年3月

公表日

2026年9月 (次回公表予定:2027年9月)

企画・編集

施設環境部企画環境課 (E-mail)fa-kikaku@ml.adm.tottori-u.ac.jp

環境報告書作成
検討委員会

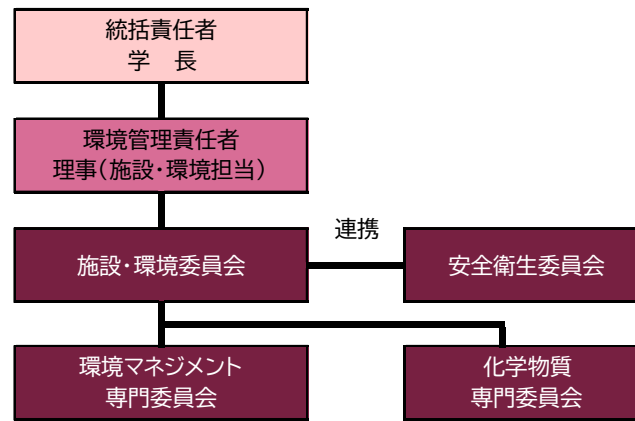
施設・環境委員会
環境マネジメント専門委員会

1. 環境マネジメント

1-1.環境マネジメントシステム

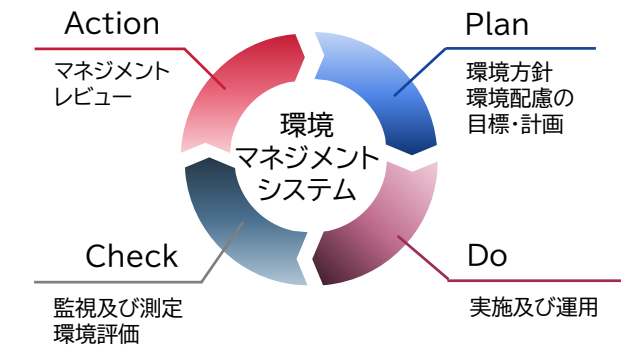
鳥取大学においては、環境マネジメントの継続的改善を図るために、2010年12月に環境マネジメントマニュアルを策定しました。このマニュアルに基づき環境マネジメントシステムの更なる充実を図り、本学における環境マネジメントを一層推進するとともに、教職員及び学生への教育等にも使用しています。

環境マネジメントシステム体制図



運営状況

上記に示す環境マネジメントシステム体制に則り、環境保全に関する取組を実施しています。



1-2.環境方針に関する目的・計画・取組状況

環 境 計 画	2025年度取組状況	2025年度 達成状況
地域から地球規模まで、環境問題の解決に貢献できる人材の育成	環境に関する教育・研究・社会貢献活動等を通し、人材の育成を図っています。	○
環境に関する公開講座等による地域との連携の推進	公開講座、サイエンス・アカデミー等を実施し、中海清掃等を通じて地域と連携した活動を積極的に実施しています。	○
新入生に対する環境教育の充実	新入生が受講する大学入門ゼミにおいて環境報告書等を使用し、環境教育の充実を図っています。	○
緑地環境保全の推進	鳥取キャンパスでは、構内緑地の管理マニュアルを策定し、緑地環境保全の推進を図っています。	○
学生・職員によるキャンパス美化活動の推進	環境月間(6月)、大学祭(10月)に、学生・職員による美化活動を実施しました。	○
省エネルギーの推進	クールビズの実施、省エネルギー啓発用ポスターを作成する他、エコアクションパトロール結果及び月毎エネルギー使用量を学内イントラネットで情報共有し、省エネルギー活動の推進を図っています。	○
	施設整備時において、サッシのペアガラス化、天井・壁面の断熱性能の向上による省エネルギーの推進を図っています。(実績)工学部H棟改修工事、浜坂本館改修工事	○
省エネルギー機器導入の推進	省エネルギー機器を導入するとともに、施設内照明及び外灯等においてLED化を進めています。(実績)施設LED化39%達成(目標値38%)	○
温室効果ガス排出量の低減	鳥取県地球温暖化対策条例に基づき、駐停車時等エンジン停止推進事業所としてマニュアルを定めるなど、温室効果ガス排出量の低減を図っています。	○
廃棄物分別の推進	新入生が受講する大学入門ゼミにおいて、鳥取大学ごみ出し検定試験等を実施し、環境教育の充実を図っています。	○
	新入学留学生オリエンテーションで、動画(英語・中国語)によるごみだし説明を実施し、廃棄物分別の推進を図っています。	○
リサイクルの推進	各建物のごみ置き場に分別表を貼り、リサイクルの推進を図っています。	○
学内不要物品等の再利用の推進	不用となった物品等を学内ホームページに掲載し、再利用の推進を図っています。(実績:11件(60品))	○

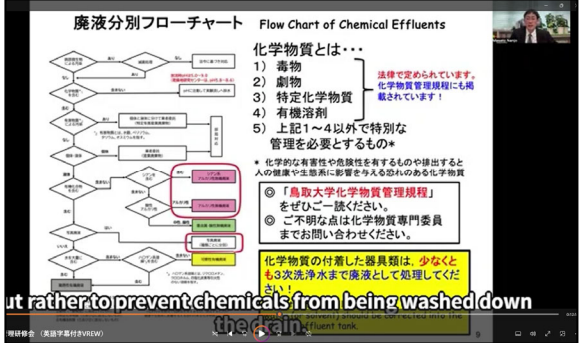
1-3.環境リスクマネジメント

現在、日本では数万種類におよぶ化学物質が製造・使用されているといわれています。
化学物質には、人体はもちろん生物体系への重大な影響を及ぼす物質をはじめ、火災・爆発等の原因となるものも数多くあります。
そのため、多くの化学物質には様々な法規制が課せられており、使用、保管、処分方法等が厳しく定められています。
大学で使用する化学物質についても、法令遵守は当然の責務であり化学物質を使用する者には、一つの過ちが重大事故につながり、大学の社会的信用の失墜等大きなリスクを背負っていることを常に意識し、化学物質の管理について責任ある行動をとることを求めています。

化学物質管理状況

鳥取大学では、化学物質について、その使用、保管及び処分に関する基本事項を定め、事故等の防止を図ることを目的に「鳥取大学化学物質管理規程」を制定しました。この規程に定める責任体制に基づく化学物質の管理を行うことを大学構成員の責務としています。化学物質等の適正な管理を目的として、令和8年度から化学物質管理システムの本格運用を実施するにあたり、令和7年10月に規程を改正しました。

さらに、化学物質を使用する教員・学生を対象に、化学物質管理及び労働災害事例等をもとに改善対策の考え方等について研修会を実施しています。
対象者に応じ、「排水管理」と「化学物質管理」をわけて実施しています。排水・化学物質管理研修会参加者のうち、化学物質研修会参加者は次の通りです。



【令和7年度排水・化学物質研修会（WEB）の様子】

【令和7年度化学物質研修会実施実績】

日程	参加者	
	学生	教職員
令和7年4月1日～ 令和8年3月31日	488人	300人

鳥取大学化学物質管理の手引き

「鳥取大学化学物質管理の手引き」は、左記の規程を補完するものとして化学物質を教育研究及び学習に使用する者が、安全に取り扱うために必要な最低限の事項や、管理に必要な様式をとりまとめたものです。多くの教員、学生の適切な化学物質管理を行うために、令和8年1月手引きの改定（化学物質管理システムの導入、管理者等の追加・明確化）を行いました。

実験系廃液の管理について

実験等で使用した化学物質を含む廃液は、手引きに基づき、廃液タンクに貯留して管理し、専門業者に処分を委託しています。また、使用した器具の洗浄においても、最低3次洗浄水までは同様に貯留管理しており、4次洗浄水以降については、必要に応じて水質確認をした上で、実験系排水として流しています。
鳥取キャンパスと米子キャンパスの実験系排水は、モニター槽において、定められた水質確認を行ったうえで、公共下水道に排出しています。



リスクアセスメントの実施について

労働安全衛生法57条の3に基づき、化学物質を取り扱う事業場は、一定の危険有害性のある化学物質についてリスクアセスメントの実施が義務付けられています。
化学物質管理責任者は、使用責任者に対して、取り扱っている化学物質のリスクアセスメント実施を指導・管理しています。使用責任者は、リスクアセスメント対象物質が含まれているかどうかを確認し、該当する際はリスクアセスメントを実施しています。

2.教育・研究・社会貢献

2-1.環境トピックス

国際学会WET2025での受賞

持続性社会創生科学研究科 工学専攻 社会システム土木コース 修士2回生

Md Ashikur Rahman Sarker

概要

2025年7月5、6日にアオーレ長岡で開催された国際学会WET2025において、Md Ashikur Rahman Sarkerさんが「Effects of the Shapes and Materials of Fluidised Carriers on the Distribution and Settleability of Microalgal-Bacterial Consortia for Wastewater Treatment」との題で研究成果発表を行い、The WET Excellent Presentation Awardを受賞しました。本研究は、低エネルギー型の下水処理を目的とした混合微生物(細菌および微細藻類)の培養において、様々な形状・素材の流動担体が適用可能であることを実証したものです。



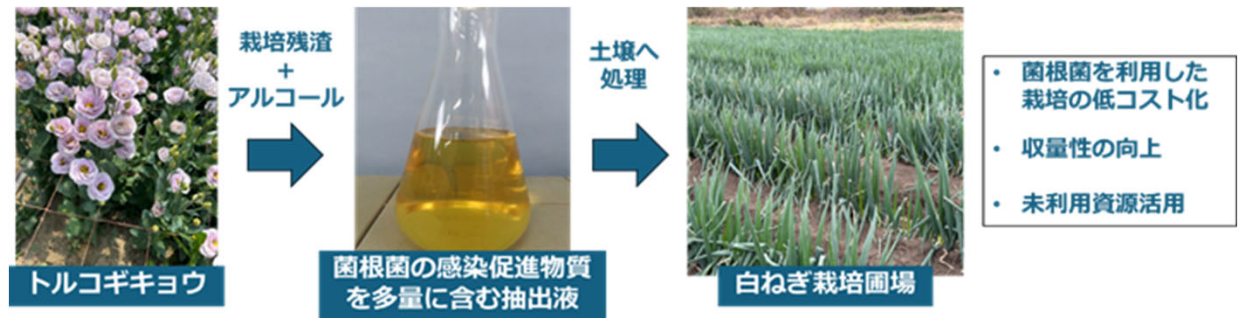
2-2.環境に配慮した教育・研究・社会貢献活動

地域参加型研究プロジェクト:トルコギキョウ収穫残渣を利用した白ねぎの収益性向上に貢献する栽培技術開発

農学部 生命環境農学科 上中 弘典 教授

白ねぎは鳥取県を代表する特産野菜で、西日本でも有数の産地です。夏の暑さや積雪を避けるために秋冬どりが中心の作型となっていますが、近年の異常気象を原因とした生育不良や病害発生により収穫量が低下しています。また栽培には大量のリン肥料が必要です。菌根菌と共生すると、植物は土壤中の吸収できないリンを利用できるようになるだけでなく、病気にも強くなります。そのため、菌根菌の利用が白ねぎ栽培での課題解決に有効ですが、コスト面での課題を解決する必要があります。

本プロジェクトでは、トルコギキョウの収穫残渣に多量に含まれる菌根菌の感染促進物質を利用して、白ねぎ栽培時の菌根菌の利用コストを低減させる技術開発に取り組んでいます。トルコギキョウは切り花として出荷する部分以外は廃棄されており、有効利用されていません。市販の消毒用アルコールを用いて、トルコギキョウの栽培残渣から菌根菌の感染促進物質を簡単に抽出する方法を開発しました。また、この抽出液を処理することで、白ねぎにおける菌根菌の感染が促進されました。開発した技術を県内の白ねぎ栽培に普及させる事を目指して、現在は鳥取市内の農家と共同で圃場試験を行っています。

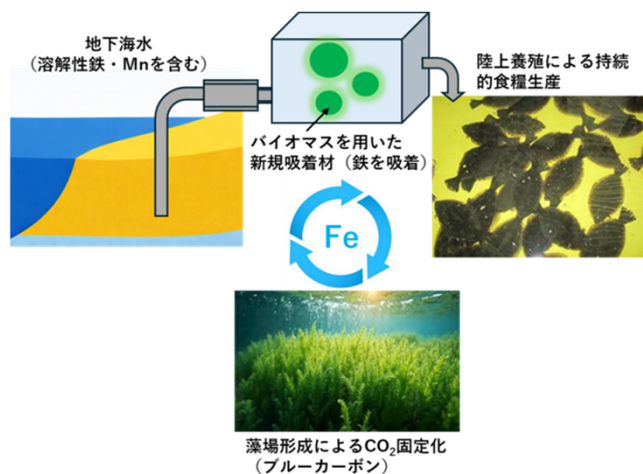


地下海水中の鉄除去と回収鉄の藻場再生への循環利用に向けたバイオマス由来吸着材料の開発

工学部化学バイオ系学科 吾郷万里子 教授

水産物需要の増加に加え、海洋資源の枯渇や海水温上昇といった課題を背景として、食料供給の安定的確保は世界共通の重要課題となっています。このような状況のもと、近年、陸上養殖技術が注目を集めています。陸上養殖は、沿岸部の地下海水を取水し、陸上に設置した水槽および循環水処理設備を用いて魚介類を飼育する養殖方式であり、自然環境の変動や疾病リスク等の影響を低減しつつ、水産物の安定供給を可能にする技術として期待されています。鳥取県においても湯梨浜町、岩美町、米子市などの沿岸地域を中心として、地下海水を活用した陸上養殖が盛んに展開されています。

一方で、鳥取県沿岸の地下海水には、溶解性の鉄およびマンガンが高濃度で含まれる場合があり、陸上養殖の安定的な運用を阻害する要因となっています。これらは酸化により配管等の閉塞や黒色化を引き起こし、水質管理や養殖物の品質に悪影響を及ぼすおそれがあります。そこで当研究グループでは、鳥取県栽培漁業センターとの共同研究のもと、地下海水中に含まれる溶解性鉄を効果的に除去することを目的として、低コストかつ低環境負荷なバイオマスを用いた新規吸着材料の開発を進めています。さらに、除去した鉄を藻場再生へと循環利用することで、陸上養殖の持続的発展と沿岸生態系の回復に貢献する資源循環型システムの構築を目指しています。



防災・防疫機能の向上を目指したため池の適正管理に関する調査研究

農学部 生命環境農学科 清水 克之 教授

近年、短時間豪雨や台風の影響が大きくなり、10月から翌年4月は鳥インフルエンザの警戒期でもあります。稲作を行わない非灌漑期(おおむね9月以降)は台風期とも重なるため、ため池の水位を下げて空き容量を確保しつつ、野鳥の飛来リスクを抑え、翌年の農業用水も確保できる管理が求められています(図1)。

そこで、鳥取県内の防災重点農業用ため池を対象にヒアリングを行い、取水・貯水管理の実態や管理体制の課題を整理しています。あわせて、ため池に入る水と使われる水を簡易に計算し、低水位管理により豪雨時の貯留余裕を確保できるか、下流への流出をどの程度抑えられるかを検討しています。さらに、鳥取県ため池監視システムの水位データから貯水回復期間を推定し(図2)、防疫と利水の両立可能性を評価しています。その過程で、水位と貯水量の関係を把握するため水上ドローンによる簡易測量を行い、既存の詳細測量結果との比較で精度を検証しています。

これらを通じ、地域の実情に応じた持続可能な管理方策を検討しており、いくつかのため池では、翌年の農業用水の確保に支障なく、非灌漑期の低水位管理が防災・防疫の両面で有効となり得ることが示されています。

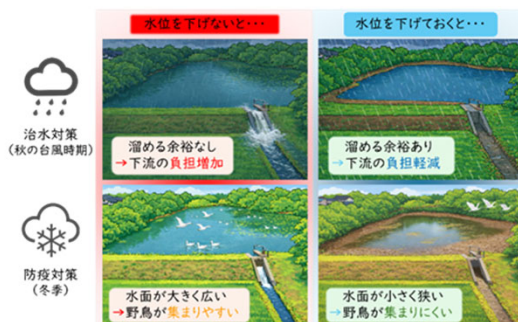


図1 治水・防疫における低水位管理の有効性

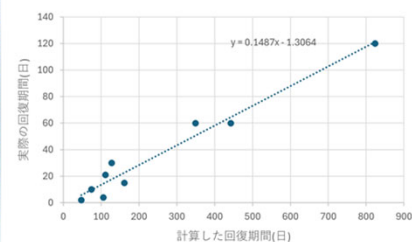


図2 ため池の貯水回復期間の推定

国際乾燥地農学演習

農学部 生命環境農学科 兵頭 正浩 准教授

作物が育たない、土が痩せる、水が足りない、エネルギーもない——乾燥地で顕在化する問題は、気候変動や資源の枯渇が危惧されている時代に、世界の課題を凝縮して映し出す「縮図」ともいえます。鳥取大学農学部で開講されている「国際乾燥地農学演習」では、国内の営農現場で得た知見を踏まえ、環境問題を“現場から”理解し、栽培・土壌・水・エネルギーを“科学的に”分析しながら、“実装可能な”解決策へとつなげる学びを展開します。フィールドでの観察・体験、生産者との対話を通じて、課題の背景と要因を多面的に捉える力を育みます。

本演習では、鳥取県ならではの農業環境を具体的な対象として扱います。県を代表する農産物である梨とらっきょうの栽培を題材に、栽培管理や土づくり、水の確保・利用、エネルギー供給、安定生産・品質確保に関わる課題を整理します。加えて、乾燥地をはじめとする各地域の条件の違いを踏まえ、課題解決の方向性を考える視点を身につけます。地域で培う課題発見力を国際協力やグローバルな課題解決へとつなげ、地域から地球規模まで環境問題の解決に貢献できる人材の育成を目指します。



梨の病気を防ぐための袋掛け(有袋栽培)



砂丘畑でらっきょうの掘り取り



生産者と一緒に手を動かしながら対話

公開講座

[トップページ>研究/社会貢献>社会貢献>地域連携>公開授業講座]

<https://www.tottori-u.ac.jp/society/social/regional/pub-lecture/>



サイエンス・アカデミー

[トップページ>附属施設・附属病院>地域価値創造研究機構>

リカレント教育推進部門>NEWS&EVENT>イベント]

<https://www.core.tottori-u.ac.jp/>



【topics】

日本での生活において外国人留学生が知っておく必要のあるゴミの分別方法について、国際交流センターが作成した動画(英語字幕付き日本語動画)を、鳥取大学国際交流・留学情報ウェブサイトに掲載しています。



<https://www.ciatu.tottori-u.ac.jp/ja/tottorilife>

2-3.環境に関する社会貢献

医学部
ラムサール条約登録湿地中海・穴道湖一斉清掃 ①

工学部
特定非営利活動法人「石西礁湖サンゴ礁基金」支援活動 (サンゴの生息に影響を与えるリンの流出低減に向けたリンの 島内循環に関する調査)
特定非営利活動法人「全国水環境交流会」支援活動 (全国いい川いい川づくりワークショップでの全体選考のコメン テーターとして参加)
千代川フェスティバル2025 子ども達を対象とした魚類環境調査イベントの実施
令和7年度公益財団法人鳥取県建設技術センター 「台風7号にみる河川災害復旧と環境再生」講演
令和7年度「鳥取駅周辺理・デザイン市民フォーラム」 「山白川周辺の魅力の発現による鳥取駅南の賑わい再生と鳥大 えきラボ構想」紹介
英国生物多様性ネットゲインの調査レポートをWebサイトで公 開

農学部
鳥取県立倉吉総合看護専門学校「人間と環境」講師
FSCあぐりスクール ②
トウモロコシを通じた「親と子」の食育プログラム
鳥取県博物館 河原の科学における水路実験実演
鳥取砂丘ビジターセンター主催「地形実験のデモンストレーショ ン」への協力
TOTTORi SDGs 小冊子への助言
智頭の山人塾における「智頭町の地形地質」に関する話題提供
このさいだから地球の営みを知りん祭 灼熱のジオフェスタ

農学部
山陰海岸ジオパーク みんなでおしゃべり8
森・棚田維持保全活動
津黒高原湿原自然再生協議会
蒜山自然再生協議会
鳥取県大山オオタカの森保護員
智頭町における堆肥を用いた農産物の品質向上による地域活 性化のための研修会講師
養父市“知と創造”農学セミナー 講師
県立鳥取湖陵高等学校「食品安全と流通システム」講師

国際乾燥地研究教育機構
乾燥地学術標本展示室(ミニ砂漠博物館)の休日公開
鳥取西高等学校「鳥大出前講義」講師
米子東高等学校「鳥大出前講義」講師 (スーパー・サイエンス・ハイスクール事業)
一般公開特設ページの開設
鳥取大学乾燥地研究センター案内ガイド更新講習・養成講習
令和7年度鳥取大学SDGs表彰:優秀賞

研究推進機構
環境再生プラザ放射線教育出前授業

附属学校
高等部専攻科で福祉人材センターの消毒作業 湖山西公民館の窓ふきや草取り、花植え
鳥取市児童生徒科学作品展への応募と出展(小)(中)
正門前バス停の清掃活動(小)



鳥取大学医学部HPより

鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンター
facebookより鳥取大学乾燥地研究センターHPより
アリドドーム 一般公開の様子

2-4.附属学校部の取組

附属小学校の取組

～「さ・し・す・せ・そうじ」「朝の清掃活動」の取組～

本校では、掃除時間に全校で「さ・し・す・せ・そうじ」の取組を行っています。これは、誰もが覚えやすい標語を合い言葉として、主体的に掃除に取り組もうという思いから生まれたものです。「さ」はさっと素早く取りかかること、「し」は静かに取り組むこと、「す」はすみずみまで丁寧にいうこと、「せ」は整理整頓を意味しています。

さらに、環境委員会の児童は毎朝、学校の玄関や階段の清掃を行っています。校舎内の階段に掃除機をかけたり、秋には正門付近の落ち葉掃き掃除したりしました。これらは、気持ちよく一日をスタートさせるとともに、来校される方々を温かく迎える気持ちを表す活動です。清掃は毎朝8時頃から10分間程度行われ、委員会で役割分担をしながら進めています。登校してくる児童に「おはようございます」と声をかけるなど、さわやかな雰囲気づくりにもつながっています。

～園芸委員会を中心とした花壇整備作業～

園芸委員会を中心に、花壇やプランターへ花の苗を植え、玄関周辺や中庭の環境整備に取り組んでいます。委員会で当番を決め、水やりや草取りなどの世話を継続して行い、年間を通して美しい花々で校舎内外を彩っています。

～尚徳クリーン活動～

保護者と教職員で構成する懇話会では、年に2回、親子で学校をきれいにする「尚徳クリーン活動」を実施しています。令和7年度は、9月に校舎外、10月に校舎内の清掃活動を行いました。校舎外では、事前に刈り取った草の回収や草取りなどに取り組み、校舎内では、エアコンのフィルター清掃や窓拭きなど、日常の掃除では手が行き届きにくい箇所の清掃を行いました。作業終了後には、校舎内外が見違えるほど美しく整い、保護者の皆様と協力しながら、より良い学校環境づくりを進めています。



附属中学校の取組

社会、理科、家庭科、保健体育など、各教科で資源の活用やエネルギー問題、地産地消や人間と環境等について、自然環境を把握し共生していく姿勢を養う学習をしています。例えば、社会科では、2年生の地理分野、近畿地方の学習において、琵琶湖の水質問題や阪神工業地帯の地盤沈下などの問題にも触れ、環境保全の視点で授業を行いました。その他の教科も、環境問題に関する学習を実生活の中で役立てるには、どのように工夫ができるかという視点でも教材研究をし、生徒に還元しています。

また、科学部では、元素を擬人化したキャラクターを用いたオリジナル周期表を作成したり、畑作を通して野菜の生育に適した土壌のpHを調べたり、いくつかの班に分かれてそれぞれ様々な活動を行っています。

生徒会活動では、福祉委員会を中心とした朝のボランティア掃除や花壇の整備を行っています。学校内だけではなく、砂丘除草ボランティアにも定期的に参加しました。

学校全体では、3年生が卒業前に「立つ鳥運動」を、1、2年生が年度末には、教室や廊下のワックスがけをするための床磨きをします。

このように、附属中学校では、学習を実生活につなげ、環境保全や環境美化に真剣に取り組む生徒の育成に努めています。



附属特別支援学校の取組

本校中学部では令和7年度、海ゴミやマイクロプラスチックの問題について学習をしています。生徒たちの中から「海ゴミを減らすために何かしたい」と声が上がリ、3年生が以前行った鳥取砂丘の清掃活動を学部全員で行うことになりました。

2月16日鳥取砂丘フィールドハウスの方に案内をしていただいて砂丘を歩くと、たくさんのゴミが打ち上げられていました。生徒たちは「どこから来たゴミなんだろう」「ここにもある！」とゴミを見つけたことを教え合い、仲間と協力して袋に集めていました。

美しい海や鳥取砂丘を守るために、今回活動したことを家族に伝えたり、ゴミをきちんと分別して捨てたり、自分たちでできることに取り組んでいきたいと思います。



また、ユニセフ出前授業を通して世界の子どもたちやユニセフの活動について学び、自分たちでできることを考え、行動しています。令和6年度のランドセルに続き、令和7年度は「図書室を作りたい」というインドの学校の校長先生の思いを受け、絵本を回収し、寄贈することになりました。校内だけでなく、附属中学校や小学校、湖山西公民館のご協力を得て、計500冊の絵本を集めることができました！イッポロ合同会社を通して、回収した絵本の一部を現地に届けていただきました。



附属幼稚園の取組

～「楽しく食べる子」食育・食と環境～

【カレーパーティー】

年長児が中心となり、全園児参加のカレーパーティーを開きます。ジャガイモやタマネギなどの野菜を育て、その他に必要なものを話し合い、地域のお店に買い物に行き、調理をします。パーティーでは、カレーができるまでの行程を劇にしたり、手遊びや歌で表現したりして、年中・年少児に楽しく分かりやすく伝えます。

幼い頃から、栽培・調理などを経験し、「食べることは楽しい」「人と一緒にすると楽しい」そんな思いをもってもらいたいと考えます。そして、大切に食べる子に育ってほしいと取り組んでいます。



【やきいも】

大学のフィールドサイエンスセンターの農場で、春にはサツマイモの苗を植え、秋にはいもほりに行きます。子どもたちは日頃から園庭に落ちている小枝や落ち葉を集め、焼きいもの準備を行います。濡れた新聞紙とアルミホイルで包んだ芋をたき火に投げ入れ、ホクホクの焼きいもを作って味わいます。



【季節の野菜作り】

春には夏野菜を植え、夏には収穫した野菜を家庭へ持ち帰ったり、秋には冬野菜を作り、収穫した野菜を調理し食べたり、持ち帰ったりします。自分たちで育てた旬の野菜は、普段は好んで野菜を食べない子どもも美味しく食べることができるようです。



夏野菜の苗植え

収穫

ポップコーン作り

お味噌汁作り

2-5.構内事業者の取組

鳥取大学生生活協同組合の取組

鳥取大学生生活協同組合は、学生・教職員の勉学・研究・食生活を支え、魅力ある鳥取大学づくりに貢献することを目的に設立されました。

三浦・米子団地において、売店、食堂の運営等を行っています。

□ オリジナル弁当容器のリサイクル

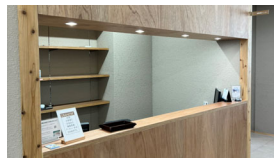
弁当容器をごみとして捨てるのではなく、回収した弁当容器は、専用の工場で加工し、もう一度弁当容器として利用するという循環型リサイクルに取り組んでいます。



回収ボックス

□ トナー・インクカートリッジのリサイクル

使用済みのトナー・インクカートリッジを回収し、再処理メーカーにおいて再製品化されています。



大学生協(ヒルピーク)
内部にあるサービスカウンター

□ 廃油のリサイクル

食堂から出る廃油(年間約5,100ℓ)は、専門業者に回収を委託し、家畜の飼料や石鹸、バスの燃料にリサイクルされています。

□ ダンボールのリサイクル

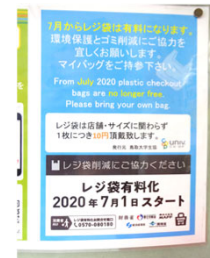
排出するダンボールは、専門業者に回収を委託し、トイレトーパー等々にリサイクルされています。

□ 国産割り箸の使用

スギやヒノキの間伐材・端材を原材料にした環境にやさしい割り箸を使用しています。

□ レジ袋削減の取組

2020年から環境保護とゴミ削減のためレジ袋を有料化し、マイバッグの利用を呼びかけています。約20,000人/月の利用客に対し、レジ袋の利用が約720枚/月まで削減されました。

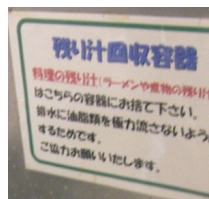


□ セルリアの脱プラスチックの取組

脱プラスチックのためにベーカリーカフェ“セルリア”では、プラスチック製ストローをバイオマス製に、プラスチック製マドラーを木製に変更し、脱プラスチックの取組を行っています。

□ 食堂グリーストラップの清掃対応

グリーストラップ内の油脂類を減らすために、カフェテリア“マーレ”及びウッドダイナー“アエル”については、油吸着材による毎日の回収清掃に加えて、自動回収装置を設置し運用しています。また、湖山地区の食堂だけではなく米子のカフェテリア“医学部食堂”でも2か月ごとにパキュムによりグリーストラップ内の油・残渣の吸引を行っています。利用者にも食器返却口で残汁の回収に協力してもらい、廃棄物として専門業者に回収を委託しています。



□ ごみ分別の徹底

ごみ集積場は鳥取市のごみ分別にあわせ、ごみ分別の徹底をはかっています。このごみ集積場は、各サークルから出るごみの分別回収にも利用されており、分別回収が定着しつつあります。



ごみ出しをする学生

恵仁会の取組

恵仁会は、鳥取大学医学部における医学の研究を奨励助成し、医学の振興と社会文化の向上に寄与することを目的に設立された一般財団法人です。

米子団地において、売店、喫茶食堂の運営等を行っています。

□ エコキャップ運動

自動販売機横に設置したゴミ箱から回収したプラスチック製のキャップを専門業者へ送付し、ボールペンやバイクの製品等にリサイクルされています。

□ 廃油のリサイクル

ローソン・レストラン・ベーカリーカフェから出る廃油(年間約4,575kg)は、専門業者に回収を委託し、ボイラー燃料等の工業用燃料にリサイクルされています。

□ 段ボールのリサイクル

排出するダンボールは、専門業者に回収を委託し、製紙会社でトイレトーパー等の紙類にリサイクルされています。

2-6. その他

学外委員会等への参画

地方自治体等各種委員は地域社会への貢献に繋がることから多くの教員が活動されており、取組が多数に上ることから環境に関する活動に絞り一例を紹介します。

医学部
米子市環境審議会
米子市廃棄物減量等推進審議会
鳥取県環境影響評価審査会

工学部
日本風力エネルギー学会 代表委員 / 学術・事業委員会 / 広報委員会 / 垂直軸型・小形風車設計技術研究会 主査
鳥取県グリーン商品認定審査会 会長
鳥取県水辺の環境保全協議会
鳥取県景観アドバイザー東部地区・土木/ランドスケープ
鳥根県神戸川の河川環境調査に関する専門家委員会
江府町笠原地域周辺環境モニタリング委員会
鳥取砂丘再生会議保全再生部会調査研究会
鳥取市さじアストロパーク管理運営委員会
国際地学オリンピック地区コーディネータ
(社)日本水環境学会 中国・四国支部幹事
鳥取市水道事業審議会
鳥取市下水道等事業運営審議会
鳥取市環境審議会
新たな一般廃棄物処理システム等検討委員会
特定既存単独処理浄化槽の判定等に関する専門部会 部会長
土木学会 地球環境委員会 / 地球環境委員会編集小委員会
多自然川づくり地域アドバイザー
千代川流域圏会議
石西礁湖自然再生協議会

農学部
鳥取県環境影響評価審査会
鳥取県河川委員会
鳥取県環境審議会
近畿中国森林管理局 保護林管理委員会
山陰海岸ジオパーク推進協議会 学術部会 / 運営委員会
鳥取県地下水研究プロジェクト
鳥取県有機・特別栽培農産物等推進協議会
湖山池環境モニタリング委員会
県指定天然記念物矢橋神社社叢調査
長寿命用途のバイオプラスチック素材開発と資源循環のライフ サイクル実証事業検討会
岩美町水道水源保護審議会委員
鳥取県森林病虫害等(松くい虫)防除連絡協議会
北栄町松くい虫被害特別対策会議
鳥取県砂丘未来会議
農林水産省消費・安全局動物衛生課 高病原性鳥インフルエンザ疫学調査チーム
高病原性鳥インフルエンザ鳥インフルエンザ専門家会合
環境への抗菌剤・薬剤耐性菌の拡散量低減を 目指したワンヘル ス推進プロジェクト
鳥取県農業農村整備事業の環境配慮に係る意見交換会
天然記念物唐川のカキツバタ群落保存活用検討委員会
とっとり生物多様性推進センター連絡協議会
鳥取県特定鳥獣保護管理検討会
鳥根県廃棄物処理施設設置検討専門委員会
環境省自然環境保全基礎調査植生調査に係る植生図検討会

農学部
鳥取市緑の基本計画検討委員会
鳥取県埋設農薬専門家会議
名勝及び天然記念物浦富海岸保存活用策定検討委員会
鳥取砂丘特例連絡会
中国横断自動車道岡山米子線(米子・境港)環境影響評価技術 検討委員会
林野庁委託事業「令和7年度全国統合データ整備・公開委託事 業」に係る検討会
文化庁委託事業「発掘調査のイノベーションによる新たな埋蔵 文化財保護システムの構築に関する調査研究事業」実務者委員
大阪府生物多様性保全ネットワーク レッドリスト検討委員

国際乾燥地研究教育機構
環境省令和7年度黄砂・大気汚染に関する国政協力推進調査業 務における「黄砂問題検討会」検討委員
アジア大気汚染研究センター 「日中韓黄砂共同研究ワーキング グループⅡ」委員
鳥取県環境影響評価審査会

研究推進機構
鳥取県放射能調査専門家会議

その他環境に関する取組

工学部
鳥取県の生コン工場16社における排水処理(中和)と廃棄物マニフェストの実況調査
共同研究「バタフライ風力発電システムの実用化に関する研究」
サンゴの生息に影響を与えるリンの流出低減に向けたリンの島内循環に向けた「八重山のたい肥を活かした海も喜ぶ農業シンポジウム」の企画・開催, 及び「石垣島産の堆肥利用で畑と畜産と海をつなぐ」を講演
秋田県立大学における「再生可能エネルギー特論」の講師
日本風力エネルギー学会における風力関係の教育研究機関調査の中国エリア担当および西日本の取りまとめ

農学部
北条道路建設にともなう植物調査についての助言(倉吉河川国道事務所)
天神川砂防堰堤建設にともなう植物調査助言(倉吉河川国道事務所)
北条道路建設にともなう飛砂調査についての助言(株)長大
JICA集団研修 「乾燥地における土地・水資源の適正管理と有効利用」
食品残渣由来堆肥の農業利用に係わる指導助言
鳥取大学施設環境部が実施するゴミ検定試験に新入生全員を合格させた
智頭町における牛糞の適正処理と畜産堆肥の品質向上に関する現地指導・助言

国際乾燥地研究教育機構
先端のカーボンニュートラル技術開発(ALCA-Next) グリーンバイオテクノロジー領域・領域アドバイザー

研究推進機構
大学発ベンチャー(株)マリンナノファイバー)を通じたカニ殻利用の普及
鳥取県の生コン工場20社における排水処理(中和)と廃棄物マニフェストの実況調査
湖山池整備工事・覆砂等効果検証についての助言(鳥取県鳥取県土整備事務所)
東郷池水質保全・水門操作についての助言(鳥取県栽培漁業センター)
(社)日本化学会 グリーンケミストリー研究会幹事
投棄物についての助言(鳥取市)

附属学校
一人一鉢花植え
児童生徒と保護者によるクリーンアップ活動
正門横花壇の整備(落ち葉掃き)小
玄関前及び中庭の花壇整備(小)
花壇等の整備(特)

【topics】

鳥取大学が行っているSDGsにつながる教育・研究・社会貢献などの取り組みを多くの方々に知ってもらうため、事例集にまとめました。

<https://www.tottori-u.ac.jp/about/effort/sdgs/>

本学はSDGsが国連サミットで採択される以前から、乾燥地研究をはじめとする環境問題や、人々の健康に関わる研究に常に取り組み、地域から国や世界への貢献につなげてまいりました。また、大学には様々な分野の専門家がオープンに議論できるプラットフォームの機能があります。さらに、最近では学生を中心にSDGsについての意識も高まっており、市民や企業、自治体などの地域の方々も巻き込んで広く協働していくことが大学の意義であると考えています。

2030年まであと4年。本学は地域の知の拠点として、これからも新しい価値を生み出し、SDGsの達成に向けて貢献してまいります。

「鳥取大学SDGs事例集2025」に掲載された231件の取組のうち、特に「7.エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」、「13.気候変動に具体的な対策を」及び「15.陸の豊かさを守ろう」に着目した教育・研究・社会貢献に関わる事例は8件増加し、94件でした。

【SDGs17の目標】



3.大学の社会的側面に関する取組

3-1.地域との関わり

鳥取大学においては、地域の歴史・文化・経済・産業と結びついた特色ある教育研究を展開し、地域の発展に貢献することは、大学の使命の一つであるとの認識に立ち、地域社会との間に強い交流関係を築き、両者の相互・相乗的な活性化を図ることを目指しています。

公開講座・サイエンスアカデミー・ボランティア等を通して交流を実施しています。また、発展途上国等における取組として、国際協力機構(JICA)を通じた技術協力として、専門家の派遣、研修員の受入れ等を実施しています。

3-2.労働安全

労働安全衛生法等の法令により、職場における労働災害・健康障害を防止するため、事業場ごとに衛生管理者の配置が義務づけられていることから、本学では第一種衛生管理者を計画的に養成し、各部局においては、職場の安全点検等を行う「部局衛生管理者」を配置して安全衛生管理体制を強化しています。

また、写真のように部局衛生管理者に対する研修会を定期的に実施し、職場巡視を実施する際の知識・技能の向上に努めています。



研修会の様子



現地で実際に使用状況を確認する様子

そのほか、有害物質等を使用する実験室等に取扱い上の注意事項を記述した安全衛生表示(化学物質等安全データシート)の掲示、全職員を対象としたメンタルヘルスマネジメント研修の実施、健康の保持増進策の一環として「鳥取大学こころの電話相談」窓口の設置等、労働安全衛生について様々な取組を実施し、安全管理・事故防止に努めています。

・「鳥取大学安全衛生管理規程(鳥取大学規則第49号)」([ハイパーリンク](#))



鳥取砂丘除草ボランティアに参加する学生及び教職員

【topics】

2025年度環境関連ニュース

- R7.4 ウズベキスタンでNUC作物の普及イベント
- R7.4 片田教授の研究「空気から水を取り出し水素を生成する技術を開発」が子供の科学2025年5月号で紹介
- R7.5 社会システム土木系学科が廃棄物処理プロセスの学習のため鳥取県東部環境クリーンセンターとリンピアいなばを見学
- R7.5 竹村准教授らの研究課題「国産花粉の安定供給を可能にするスマート農業技術の開発と社会実装体制の確立」が「スマート農業技術開発・供給に関する事業」に採択される
- R7.7 2025年度JICA課題別研修「乾燥地における持続可能で強靱な農業のための土地・水・エネルギー管理」を実施
- R7.7 鳥取大学乾燥地研究センター「一般公開2025」を開催
- R7.8 石井准教授らが世界で初めてコムギとトウモロコシの雑種植物の作出に成功
- R7.9 学生及び教職員が鳥取砂丘除草ボランティアに参加
- R7.9 「第33回地球環境シンポジウム」を鳥取キャンパスにて開催
- R7.11 日本学術会議 中国・四国地区学術講演会「持続可能な未来への挑戦:限界地域におけるイノベーションと総合知」を開催
- R7.11 山崎准教授の研究「食料安定供給のための水・エネルギーの統合的評価に関する研究」が農学進歩賞を受賞
- R7.12 令和7年度鳥取大学SDGs表彰式
- R7.12 社会システム土木系学科が浄水処理施設の学習のため江山浄水場を見学

4.環境パフォーマンス

4-1.マテリアルバランス

INPUT			
総エネルギー			
種別	使用量	換算係数	エネルギー使用量
電力	35,878,949 kWh	8.64	309,994,119 MJ
灯油	8,064 L	36.5	294,336 MJ
重油	39,510 L	38.9	1,536,939 MJ
都市ガス	1,067,284 m ³	46.05	49,148,428 MJ
液化石油ガス	2,631 kg	50.1	131,813 MJ
ガソリン	19,153 L	33.4	639,710 MJ
軽油	11,414 L	38.0	433,732 MJ
合計			362,179,077 MJ
物質			
紙			73,078 kg
環境物品の調達	139 品目	調達率	99 %
水			
上水			181,136 m ³
工業用水			31,670 m ³

総エネルギー使用量は、電力使用量・化石燃料使用量により算出し、熱量換算係数は、「エネルギーの使用の合理化等に関する法律施行規則」に定められる係数に基づいています。

総物質使用量は、実験装置・事務用品等がありますが、これらの物品の使用量は、定量的に測定することが難しく、また、環境負荷も比較的小さいと考えられることから、コピー用紙の使用量のみを記載しています。

環境物品等の調達については、国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律に基づき、環境物品等の調達の推進を図るための方針を定め、できる限り環境への負荷の少ない物品等の調達に努めています。

水資源使用量の内訳は、各団地により異なり、上水・工業用水・地下水・雨水を利用しています。雨水は雑用水に使用し、地下水は農場散水用に使用していますが、使用量は計量していません。



OUTPUT	
温室効果ガス	
CO ₂	18,239 t-CO ₂
（上記の内Scope1）	2,806 t-CO ₂
（上記の内Scope2）	15,433 t-CO ₂
廃棄物	
一般廃棄物	666 t
産業廃棄物	1,809 t
（うち特別管理廃棄物）	（1,239 t）
排水	
公共用水路	8,666 m ³
工業用水	212,339 m ³
[生物学的酸素要求量(BOD)(平均値)]	
鳥取	129.0 mg/L
米子(医学部)	5.2 mg/L
米子(附属病院)	140.0 mg/L

Scope1

→ 事業者自らによる温室効果ガスの直接排出

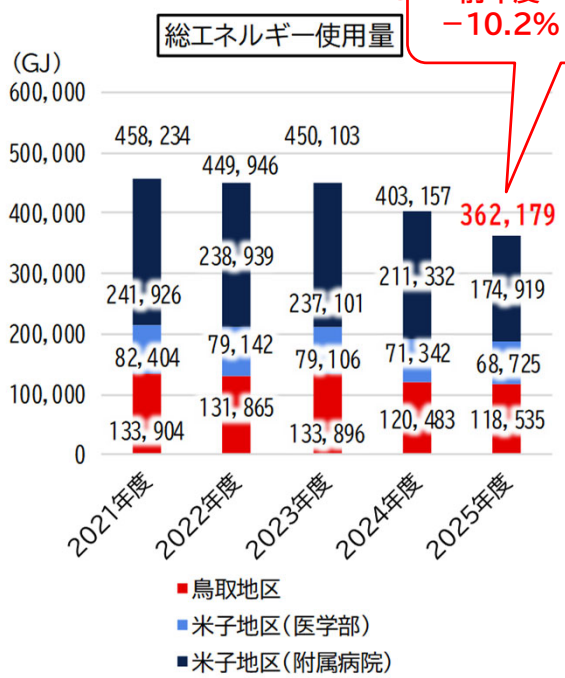
Scope2

→ 他社から供給された電気、熱・蒸気の使用に伴う間接排出

2025年は5,019m²における空調設備を高効率空調設備に更新し、16,788m²の照明設備をLED照明に更新するなど、鋭意省エネルギーに取り組んでいます。

4-2.INPUT

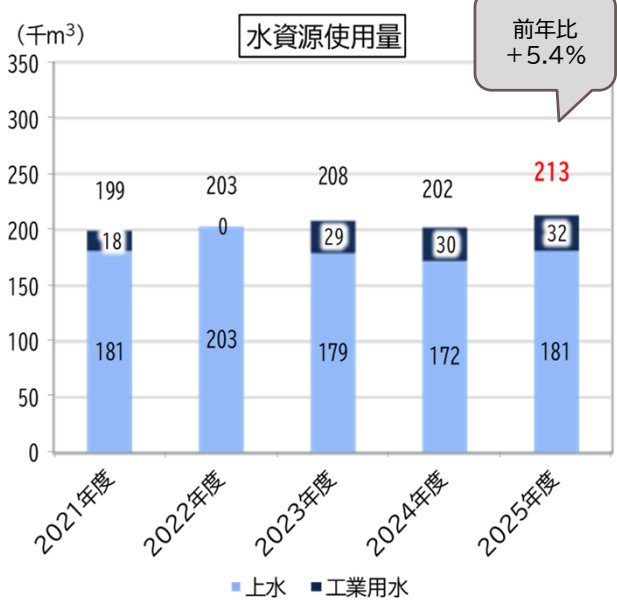
総エネルギー使用量推移



総物質使用量推移



水資源使用量推移



環境物品等の調達状況

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
調達品目	157品目	160品目	151品目	136品目	139品目
調達率	100%	100%	100%	100%	99%

※ 環境物品等の調達の実績の概要
<https://www.tottori-u.ac.jp/about/procurement/env-goods/>

新エネルギー利用状況

エネルギーの種類	7月～3月発電量(kWh)	換算係数	エネルギー使用量(MJ)	設置場所
太陽光	25,270	8.64	218,333	大学会館

グリーン購入法に適合し、必要な機能を有したドクターカーが無かったため、調達率が100%を下回りました。

計測記録機器を7月に修繕しました。

【総評】

- 総エネルギー使用量の減少要因は、電気使用量前年比**4.3%減少**、A重油前年比**28%減少**、都市ガス前年比**34.8%減少**したことにあります。
- 総物質使用量の減少要因は、業務DX推進が進んだことが要因として考えられます。
- 水資源使用量の主な増加要因は、鳥取地区で8%増加、附属病院で7%増加したことにあります。
(工業用水は米子地区の洗浄用水として活用しています)
- 水資源使用量の削減のため、工学部J棟及びK棟では雨水利用システム※を継続して運用しています。
- 環境物品等の調達率が100%を下回りました。

※【雨水利用システム】
屋上で集めた雨水を沈砂槽及び沈殿槽でろ過し、滅菌を行った後、屋内消火栓やトイレ用水として再利用する。

4-3.OUTPUT

温室効果ガス

温室効果ガス排出量は、二酸化炭素以外の温室効果ガス(メタン、フロン等)の排出量が僅少であると考えられるため、二酸化炭素排出量のみ考慮します。温室効果ガス排出量は、購入電力及び灯油・重油・都市ガス・液化石油ガス(LPG)・ガソリン・軽油(以下、「化石燃料」という。)の消費量に「地球温暖化対策の推進に関する法律」で定められる二酸化炭素換算係数に基づいて算出しています。

2025年度は省エネ改修の促進により電気使用量前年比4.3%減少、A重油前年比28%減少、都市ガス前年比34.8%減少となりました。温室効果ガス排出量の総量は目標値を15.4%上回る結果となりましたが、昨年度の目標値+39.3%から大幅に削減することができました。

温室効果ガス排出量は契約電力会社の温室効果ガス排出係数に依存しており、2024年に比べ低い数値となったものの目標値を達成するには至りませんでした。

継続して省エネ改修及び省エネ意識醸成に努めつつ、2026年度の目標値14,837(t-CO₂)を達成するためには、温室効果ガス排出量の約8割を占める購入電力を7%削減するか、温室効果ガス排出係数が0.35以下となる電力会社から電力を購入するなどの検討を行っていきます。

「地球温暖化対策に関する実施計画」

温室効果ガス排出量を2030年度に2013年度比60%、2040年度には75%削減し、遅くとも2050年度までに、実質的なカーボンニュートラルを目指します。

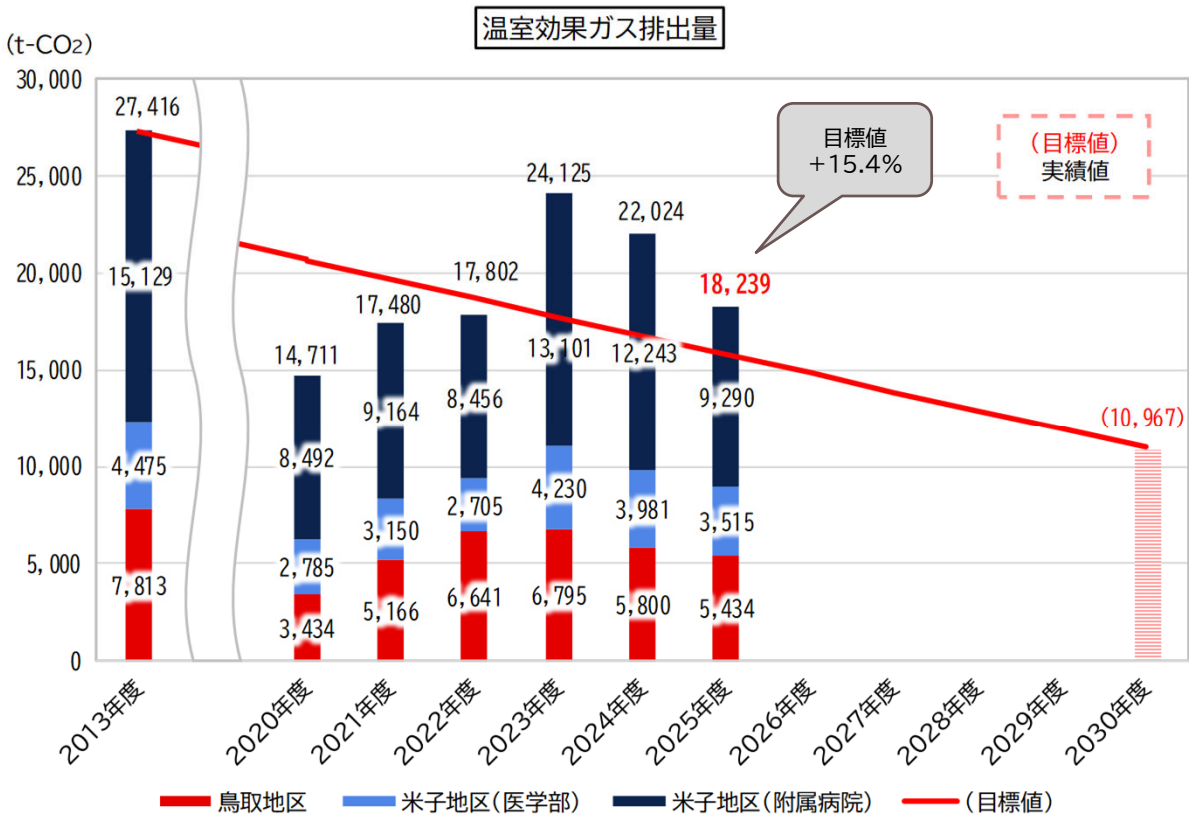
- ◆ 大規模改修におけるZEB Orientedの達成
- ◆ 2030年度までに施設の照明LED化率100%
- ◆ 省エネルギー、高効率機器の導入
- ◆ 再生可能エネルギー電力調達の推進

地球温暖化対策に関する実施計画

[トップページ>大学紹介>大学の取組>カーボンニュートラルへの取組>鳥取大学カーボンニュートラル行動方針>地球温暖化対策に関する実施計画]

<https://www.tottori-u.ac.jp/about/effort/carbon/action/plan/>

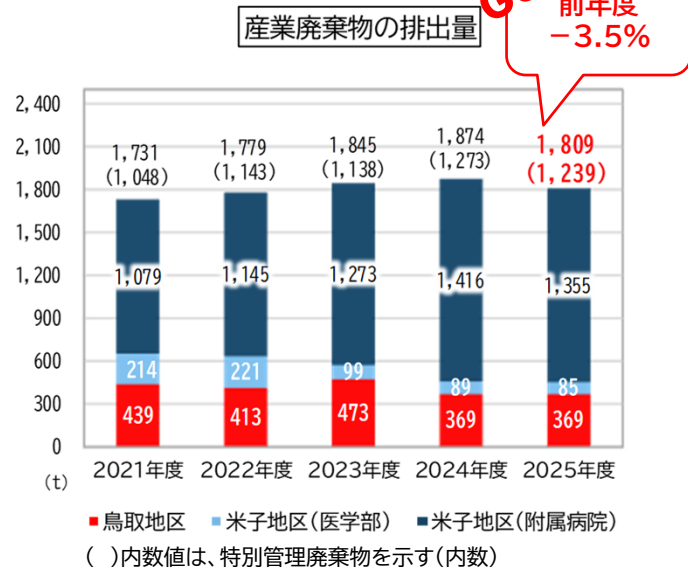
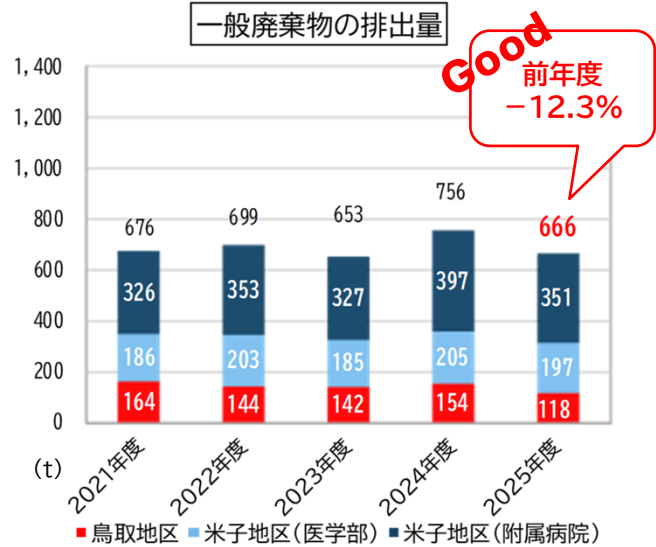
報告年度温室効果ガス排出量	=	報告年度温室効果ガス排出量 (購入電力)	+	報告年度温室効果ガス排出量 (化石燃料消費量)
18,239 (t-CO ₂)		15,433 (t-CO ₂)		2,806 (t-CO ₂)



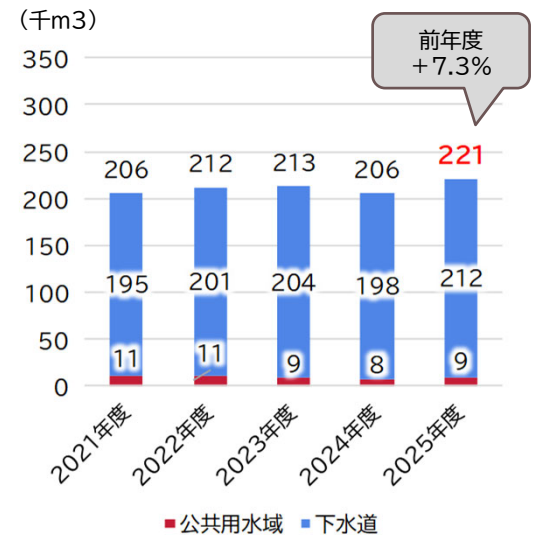
項目		基準値 2013年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	目標値 2030年度
温室効果ガス排出量 (t-CO ₂)	目標値		19,675	18,708	17,740	16,772	15,805	14,837	10,967
	実績値	27,416	17,480	17,802	24,125	22,024	18,239		

赤字:実績値が目標値を超える

廃棄物排出量推移



総排水量推移



項目		基準値 (2018~2023 平均値)	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	目標値 (2024~2026 平均値で 基準値-1%)
鳥取地区廃棄物 排出量 (kg)	(可燃物)	84,844	74,942	78,172	75,256	70,806	66,884	84,000
	(古紙類)	64,718	62,930	65,840	66,830	83,540	51,300	64,068

【排水管理】

「実験系廃液の管理について(p.4)」で示したように、鳥取キャンパスと米子キャンパスの実験系排水は、モニター槽において、定められた水質確認を行ったうえで、公共下水道に排出しています。

このほか公共下水道についても、右図に示す項目を含め、46項目について水質を測定・監視し、適正な管理に努めています。



【測定結果】

		(単位:mg/ℓ)					
	分析項目	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	基準値
<三浦・浜坂団地> 鳥取地区 (1回/年)	BOD	118	111.8	155.2	140	128.5	< 600
	窒素含有量	21.8	48.8	47	55	37	< 240
	りん含有量	3.6	7.3	5.8	8.2	5.2	< 32
<医学部> 米子地区 (4回/年)	BOD	7.1	4.9	15	12	5.2	< 600
	窒素含有量	3.3	2.9	3.7	2.1	2.5	< 240
	りん含有量	1	0.6	0.6	0.3	0.4	< 32
<附属病院> 米子地区 (4回/年)	BOD	204.2	170	204.3	199	139.7	< 600
	窒素含有量	31.7	26.9	42	35.9	34.9	< 240
	りん含有量	4.1	3.4	4.5	5.5	4.6	< 32

化学物質の排出・移動量

2025年度のダイオキシンの排出量及びばい煙の排出量は、ともに基準値以下でした。化学物質取扱量は、キシレンとヘキサンが指定取扱量以上となり届出の対象となりました。

ダイオキシン

ダイオキシン類は、数多くの物質からなる混合物です。その有害性は、混合物を構成する同族体によって異なりますが、「発がん性」「肝毒性」「免疫毒性」及び「生殖毒性」があるといわれています。

「ダイオキシン類対策特別措置法」により、排出ガスについて、測定を行わなければならない施設として、実験動物焼却炉が該当します。

		2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	基準値
排出ガス	実験動物焼却炉 (単位:ng-TEQ/m ³ N)	0.018	0.0036	0	0.12	0.12	< 5
ばいじん等	実験動物焼却炉 (単位:ng-TEQ/g)	0	0.15x10 ⁻³	0	0.006	0	< 3

ばい煙

ばい煙は、物の燃焼等に伴い発生するいおう酸化物、ばいじん、有害物質(カドミウム及びその化合物、塩素及び塩化水素、弗素、弗化水素及び弗化珪素、鉛及びその化合物、窒素酸化物)です。「大気汚染防止法」では、33の項目に分かれ、一定規模以上の施設が「ばい煙発生施設」として定められています。鳥取大学では、ばい煙濃度測定義務のある施設として、自家発電機2基が該当します。

		2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度	基準値
ボイラー	全窒素酸化物濃度 (単位:ppm)	41～89	55～83	73～133	53～65	45～78	< 150
自家発電機	ばいじん濃度 (単位:g/m ³ N)	0.005～ 0.009	0.001～ 0.002	0.006～ 0.01	0.008～ 0.01	0.029	< 0.1
	全窒素酸化物濃度 (単位:ppm)	612～697	742～806	575～688	464～492	459～485	< 950

特定化学物質

「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」で定めるPRTR(Pollutant Release and Transfer Register)制度に基づき、対象物質の年間取扱量が指定量(第一種指定化学物質1t/年特定第一種指定化学物質:0.5t/年)以上を取り扱うと、環境に排出した量と、廃棄物として処理するために事業所の外へ移動させた量を届け出る必要があります。

2025年度の主な取り扱い物質は、第一種指定化学物質に指定されるキシレン・ヘキサン・トルエン・クロロホルムでした。キシレン移動量1,04kg、ヘキサン移動量1,109kgで指定取扱量以上となり、届出の対象となりました。

【総評】

- 一般廃棄物の排出量減少要因は、古紙前年比**17%減少**、不燃ごみ前年比**52.7%減少**したことによります。
- 産業廃棄物の排出量減少要因は、主に病院から廃棄される感染性医療廃棄物が前年比**4.2%減少**したことによります。
- 令和7年度の全体廃棄物処分量について、鳥取地区及び米子地区ともに前年比**5%程度減少**しました。
- 総排水量の増加要因は、工学部水使用量前年比29%増加、病院水使用量前年比5%増加したことによります。
- 排水管理結果は適正な管理により各々基準値を下回っています。

【OUTPUT目標値】

- 鳥取地区廃棄物排出量について2024年に目標値の見直しを実施しました。継続して削減に取り組みます。

【OUTPUT削減に向けた取組】

- 廃棄物の分別
- 電子化による印刷量の削減
- 節水に関する学内広報
- 自動水栓洗面台の設置
- トイレブース内に擬音装置の設置
- 大学会館食堂における水質汚染の抑制
 - 洗浄機の洗剤濃度の適正化
 - グリストラップの清掃
 - 浮遊油分吸着機械による油分排水の抑制
 - 油分を含む残汁の油分吸着作業の徹底

5. 環境コミュニケーション

編集後記

今年も「環境報告書2026」を皆様にお届けすることとなりました。本報告書の作成にあたり、資料の提供や原稿の執筆など、多くの皆様にご協力いただきましたことに、心よりお礼申し上げます。

環境を取り巻く課題が複雑化する中、大学における環境への取組も、省エネルギーや資源の有効利用にとどまらず、教育・研究、学生の活動、地域との連携など、様々な場面へと広がっています。本報告書の編集を通じて、こうした一つ一つの取組の積み重ねが、本学の環境活動を支えていることを改めて感じました。

また、大学には、教育・研究を通して環境に関する知識や技術を蓄積し、その成果を社会へ発信していく役割があります。同時に、大学で学び、働く一人一人が、日々の活動の中で環境との関わりを意識することも大切です。学内で行われている様々な取組を共有し、互いに知ることによって、新たな気づきや活動につながっていくことも期待されます。環境報告書が、そのための一つの橋渡しとなればと考えています。

本報告書では、本学で行われている様々な取組を、写真や図表などを取り入れながら、できるだけ分かりやすく紹介しています。本報告書を通して、身近な活動と環境とのつながりを知っていただき、環境について考え、自らできることに目を向けるきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、本報告書をご覧いただいた皆様からのご意見やご感想を、今後の環境活動や報告書づくりに生かしてまいりたいと考えております。引き続き、本学の環境活動へのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

環境マネジメント専門委員会 委員長 田川 公太郎

鳥取大学環境報告書の作成に関する検討委員会 委員名簿

施設・環境委員会			環境マネジメント専門委員会		
委員長	理事(施設・環境担当)	三木 達行	委員長	農学部教授	田川 公太郎
	地域学部副学部長	高田 健一		地域学部教授	川井田 祥子
	医学部副学部長	中曾 一裕		工学部教授	宮本 善和
	農学部副学部長	松村 一善		農学部准教授	佐久間 俊
	工学部副学部長	増井 敏行		農学部教授	霜村 典宏
	附属病院副病院長	谷口 文紀		国際乾燥地研究教育機構准教授	井芹 慶彦
	施設環境部長	吉川 正紀		教育デザイン本部准教授	滝波 雅子
	総務企画部長	平尾 賢司		医学部助教	増本 年男
	財務部長	久保 信		医学部講師	河月 稔
	学生部長	藤原 匡利		施設環境部企画環境課長	藤本 靖二
	研究推進部長	高橋 陵子		米子地区事務部	長瀬 肇
	米子地区事務部長	山崎 正人		施設環境課長	

環境報告書ガイドライン2018との対照表

項目		該当ページ
【1】 環境報告の基礎情報	環境報告の基本的要件	P.2
	主な実績評価指標の推移	P.16, 17, 18, 19
【2】 環境報告の記載事項	経営責任者のコミットメント	P.1
	ガバナンス	-
	ステークホルダーエンゲージメントの状況	P.8-14, 16
	リスクマネジメント	P.4, 14
	ビジネスモデル	-
	バリューチェーンマネジメント	P.16
	長期ビジョン	P.1, 17
	戦略	P.1
	重要な環境課題の特定方法	-
	事業者の重要な環境課題	P.3
【3】 主な環境課題とその実績評価指標	気候変動	P.7, 15, 17
	水資源	P.6, 15, 16, 18
	生物多様性	P.5
	資源循環	P.6,15,16,18
	化学物質	P.4,15,19
	汚染予防	P.4,15,19